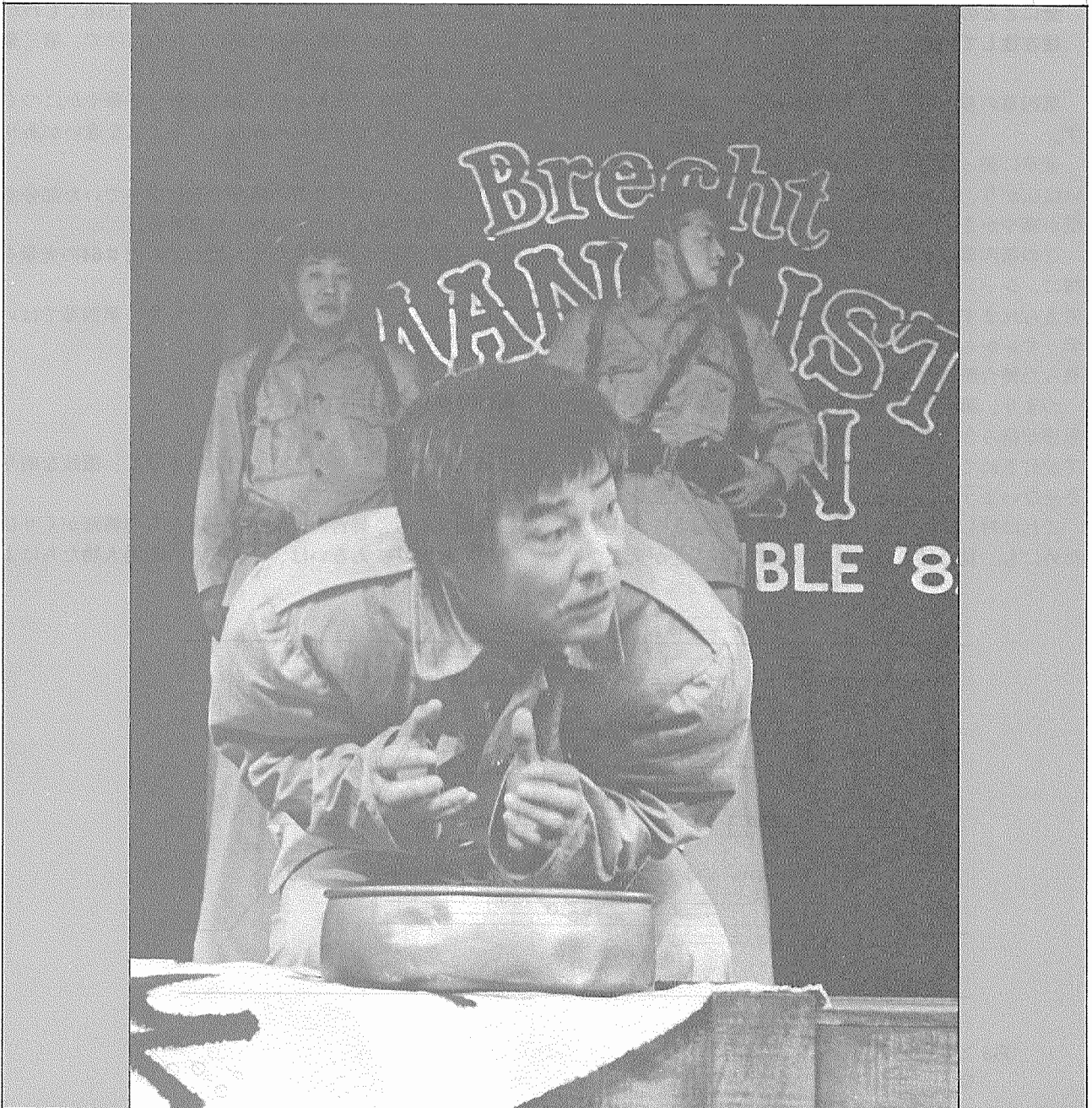


時代を越える光感覚.....

1982-3・★VOL-43

MARUMO LIGHTING NEWS

マルモ・ライティング・ニュース



東京演劇アンサンブル公演「男は男だ」

舞台照明の基本 最終回

舞台照明プランの実例

●三島由紀夫作「鹿鳴館」を例題として

小川昇 (舞台照明家)



第四幕の幕開き

その日の午後九時すぎ、道具は前幕に同じ。装飾は完全にととのい、すでに来客がざわめき、給仕たちが右往左往している。

第四幕の幕が開くと、舞台は華やかな舞踏会の場面です。

豪華に装った夫人たちの明るいざわめきが舞台いっばいに広がり、飾りつけられた万国旗や、灯入れされた提燈が華やかさを一層ひきたてています。

この第四幕の光のデッサンとしては、前幕の終盤と同様に、シャンデリアからの明りを中心とした光の状態が考えられますが、前回でも述べましたように、同じ光のデッサンから出発しても、第三幕と第四幕では、印象の異った舞台照明が展開されなければなりません。

つまり、第三幕では陰謀が交され、さまざまな人物の思惑が絡み合った芝居が展開されますので、シャンデリアが灯されて、室内が明るくなっても、華やかさを感じさせないように、光量や色について配慮されました。

これに対して第四幕では、舞踏会の盛況さを表現するためにも、見た目の華やかさを強調することが重要なポ

イントになっています。特に、灯入れされた提燈などの装置が、華やかな舞台照明として展開する上で、重要な手がかりになります。

第四幕の具体的な仕込みについては、仕込図でもわかるように、多少の器具の追加がみられるだけで、第三幕とほとんど変わりません。

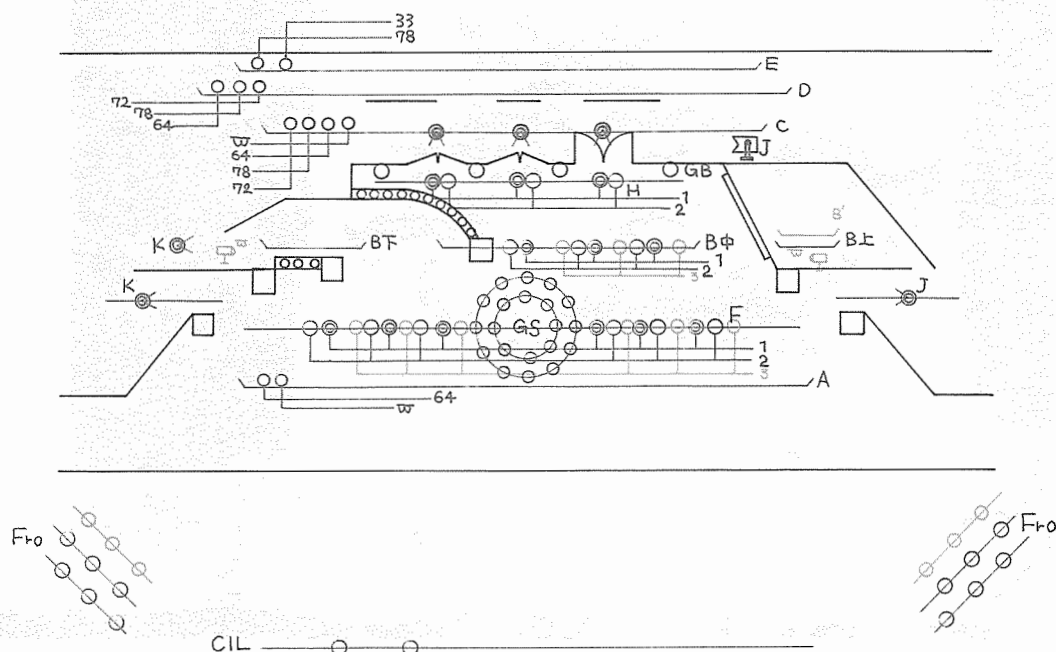
しかし、全体の印象を第三幕に比較して華やかにつくるために、光量や色を考える上で次のような違いがあります。

- ①第三幕のシャンデリアの明りで影になっていた部分を、追加した器具（3）でアンバーに染める。
- ②第三幕で冷たい感じをつくりだしていた#64の光量をおさえる。
- ③いくらかしぼってあったW（ナマ）を、第四幕ではいっばいに明るくする。

照明の変化について

第三幕では、芝居の進行や内容にそって、微妙な明りの変化が効果をだしていました。

第四幕でも、舞台いっばいに来客たちの舞踏がくりひろげられたり、あるいは、2、3人の登場人物たちによ



る緊張した重要な演技がおこなわれたりします。

この舞台上の変化に対して、照明をどう考えるのかも、第四幕の舞台照明の1つのポイントになります。

こういった舞台上の、内容の違いによる変化に対して、ここでは、ことさらに照明を変化させていません。

それは、着飾った人物が大勢舞台に登場する舞踏のシーンでは、豪華な衣裳などが照らされることによって、舞踏会の照明としてつくられた華やかな光が、その存在が観客に意識され、舞踏会の雰囲気伝わりますが、同じ照明でも、人物たちが退場し、光の照らす対象物がなくなると、観客には華やかさは感じられず、おちついた雰囲気の中で、緊張した数人の芝居に集中させることができるからです。

このように、光は照らす対象物によって、異った印象を見る人に与えますので、第四幕では実際には照明の変化をつくらなくても、舞台上の人物の登退場で、観客には大きな変化が印象として残ります。

従って、第四幕の基本の明りとしてつくられた幕明きの華やかな照明だけで、十分に役割を果たすことができるのです。

第四幕のポイント

第四幕での照明ポイントとして、上手の舞踏場、下手の階下へ通じる階段の手すりなどへの配慮があります。

上手に見える入口は、次の間の舞踏場へと通じているわけですが、目に見えている舞台以上に華やかで、明るい舞踏場の様子が、観客に想像できるように入口のところの明りをつくらなければなりません。

これは前回にも述べましたが、観客からは見えない舞台袖の奥の部分について、舞台と連続した空間が続くという想像を与える明りをつくることと同じです。

特に、第四幕では登場人物がひんばんにとりなる舞踏場から行き来するわけですから、その部屋の様子を、観客に見せないで想像させることは、とても大事なことです。

さらに、必要に応じて踊っている人たちの影を、入口から見える舞踏場の壁に映して、観客に見せることも一つの工夫としておもしろいでしょう。

「踊りが近づいて来る」というセリフの前に、予備的に壁に影を映したり、芝居の間つなぎなどに、この影を利

①舞踏会

第四幕では、シャンデリアやブラケットに加えて、飾りつけられた提燈が光のデッサンのポイントになります。

舞踏会の場面になると、舞台いっぱいには広がった登場人物たちの豪華な衣裳が、照明に照らされることによって、明るく華やいた雰囲気をつくりだしています。

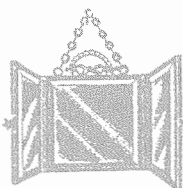


②終幕

舞台では、悲劇的なクライマックスへ向って、緊迫した演技が行われています。この時の照明は、①舞踏会と同じですが、豪華な衣裳を着た大勢の客たちが、舞台上から去ったこの場では、華やかさよりも、二人の演技に観客を集中させる、おちついた雰囲気をつくりだしています。このように、光は、照らす対象物によって、異った印象を観客に与えます。



「鹿鳴館」第四幕あらすじ



●参考書「鹿鳴館」が収録されている図書
現代日本戯曲大系 第3巻(三一書房)
三島由紀夫全集 第21巻(新潮社)

夫の策略も知らず、朝子は、一際美しい洋装姿に人々の羨望の目を集めながら、りっぱに女主人の役をつとめています。

ダンスが始まろうとしたその時、壮士の乱入が告げられ、久雄は外へ走り出ます。やがて、朝子の毅然とした

説得を受けて、壮士達も立去り、ホッとしたところへ、銃声が聞こえ、傷ついた清原が姿を見せます。襲われた清原は、敵が息子とは気づかずに久雄を撃ち殺してしまったのです。理想にのみ生きる父を憎みながらも、愛されたかった久雄は、初めから父の手にかかるつもりだったのでしょうか。清原は、最早理想に生きる力さえなくし、道然と去っていきます。偽壮士を乱入させ、清原をおびき出し、久雄の手にピストルを握らせさせたのが影山だと知った朝子は、その冷血さをなじります。

今宵限りで夫のもとを去り、清原の妻になろうと心定めた朝子は、まだまだ続く夜会のワルツに加わります。影山とともに華麗に踊る朝子の耳に、遠く銃声が伝わってきます。

(歌舞伎座パンフレットより)

用すると大変効果的です。

次に、舞台下手側の手すりは、階下へ通じる階段の手すりですが、階下でおこる壮士たちの乱入、そして、それに対する朝子の階下へ向っての演技など、実際には装置として作られていない階下を想定しておこなわれます。この時は、照明、音響などの効果によって、階下の様子を観客に伝えなければなりません。

そのための照明の工夫としては、朝子の階下へ向っての演技の時に、下方向からの光によって、階下からの明りが朝子を照らしているようにつくります。この下からの明りは、同時に朝子の強い性格を強調する効果もあります。

最後に

これまで三回にわたって「鹿鳴館」を題材にしながら、各幕ごとの光のデッサンから舞台照明への展開まで、舞台照明の実際について考えてみました。

戯曲の全体の流れを握むことから始まり、ト書きやセリフの中から、照明を考える上で重要なポイントになる部分をどう読み取っていくか、また、舞台装置と照明との関係、そして、最も重要な演出意図を照明によってどう効果的に表現していくか、そういったことが理解されたと思います。

今回取りあげた「鹿鳴館」は、これまでに日生劇場、明治座、歌舞伎座、名古屋の中日劇場、京都の南座などで度々上演されてきました。

その上演の際、問題になったのは、これらの劇場の条件がそれぞれ非常に異なるということです。もちろん、照明設備も同様に異なります。そういった違う条件の中で、同一の芝居を上演し、同一の結果をつくるためには、使用器具やその配置にそれぞれ異った工夫が必要になってきました。

同じ芝居を上演するために、各劇場の舞台の条件を同一にすることはできないことではありません。しかし、実際問題としてはなかなかむずかしく、また、観客席の条件まで同じにすることを考えると、全ての劇場を同じ条件に統一することは不可能といってもよいでしょう。

従って、どうしても異った条件の基で、同一の結果をつくるための工夫が必要になってきます。

そのためには、このつくられた明りが、どういう考えに基づいた明りで、どのような効果を意図してつくられたものなのか、ということが、はっきりと理解されていなければなりません。この基本が理解されていてこそ、同一の結果をつくるための工夫が生まれてくるのです。

このように、現場でのさまざまな工夫によって、異った設備でも同一の効果をつくり出すことは可能です。これは、舞台照明があくまでも光だけでつくられるもので、設備は光をつくるためのものであるということの証明でもあるといえます。

今回は、各劇場のそれぞれ異った仕込みによる同一結果については、細かく別々に説明する余裕はありませんでしたが、基本となる舞台照明の考え方、つくり方は理解できたと思います。

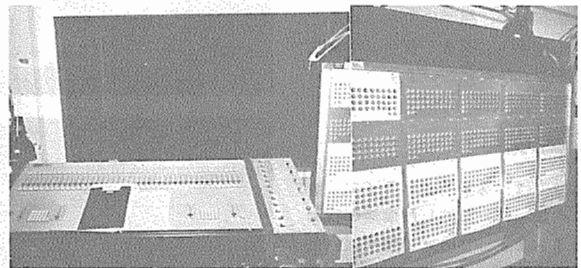
海外劇場事情

21段プリセット

横田昭治 (照明家)

日本でも調光機の進歩は目覚ましく、多くの劇場がS.C.R.等の半導体調光機に変り、その幾つかではメモリーシステムを採用し始めている。そのせいか若いチーフ・オペレーターの中には、オート・トランス方式の調光機を上手く操作出来ない人が出て来た。まして抵抗器なんて見た事も無い人が居るだろう。しかし、現在でも抵抗器がなければ困る場合もある。

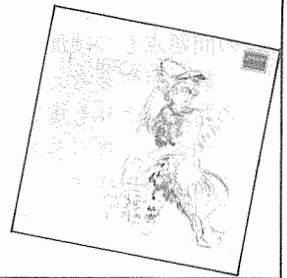
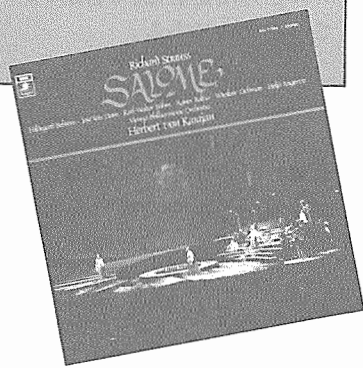
アメリカの古い劇場の中には電源が直流のところがあって、旅公演の時、コースの中に1カ所でも直流の劇場があれば、全コースを抵抗器による調光システムを持ち歩く事になる。事実Jhon F. Kennedy CenterのEisenhower Theatreで上演された『The Merchant』は、舞台袖に持ち込んだ抵抗器で調光していた。この劇場は直流ではないが劇場の調光機は使用しない。その理由は照明プランが抵抗器で作られたものであるからだけでなく、劇場の調光機を使うと、旅公演のステージ・ハンド(スタッフ)の仕事が無くなりクレームが付くからである。また、1977



年頃New YorkのMetropolitan Opera HouseやWashingtonのKennedy Center等、常設の照明設備を持つ劇場や劇団の制作者の間で、調光機のメモリー化に大きな関心が持たれた。San FranciscoのA.C.T.や、WashingtonのArena Stag等早くもメモリー化された劇場もある。その理由は高い人件費の節約と、従来型3段以上の多段プリセット式よりも、マイコン利用のメモリー・システムの方が安価になった為である。そんな中に、Yale Repertory Theatreのユニークな多段式の調光システム(写真)を紹介しよう。40チャンネルではあるが何んと21段プリセット。フェーダーがボリューム型なのでコンパクトなと、穴の開いた記録紙を嵌め込めば記録が手早く出来、21段もあればそうたびたび組変える必要も無く、完全に1人で操作することができる。

いずれにしても、目的に合ったシステムを考え選び、尚且つそれを最大限に運用すれば最新システムでなくとも最良の結果を生む事が出来るわけだ。

オペラの照明



吉井澄雄 (舞台照明家)

照明家とオペラ

「オペラ」という言葉は、外来語が氾濫している昨今でも、まだ世の中によく馴染まれていないらしい。

9月の始めに、福岡のサンパレスで九州オペラ・フェスティバルが行われたが、その折たまたま一通の電報が私の目を惹いた。鹿児島オペラ協会から西日本オペラ協会にあてた祝電だったが、電文を読むと発信人がカゴシマオテラキョウカイ、受信人がニシニホンオテラキョウカイになっている。電報局のミスかなとも思ったけれど、1ヶ所ならともかく、「オペラ」という言葉がすべて「オテラ」になっているから、この電報を受付けた電報局員が、「オペラ」と聞いたとたんに、反射的に「お寺」を思い浮べてしまったのではないかと私は推測する。

たしかに「オペラ」という言葉よりも「お寺」という言葉のほうが、馴染んだ言葉だし、日常よく使われてもいる。しかし、1度でもオペラを観たことがあるか、聴いたことがある人ならば、まずオペラをお寺と聞きちがえることはないだろう。この電報を扱った人は、おそらくオペラを観たことも聴いたことも無いのではあるまいか。

オペラを未だかつて上演したことの無い町ならともかく、鹿児島は我国のなかでもオペラの上演活動の活発さでは有数の都市である。にもかかわらず、電報局はオペラをお寺とまちがえた。

舞台照明を仕事としている人、もしくは舞台照明を志している人は、電報局の人たちよりも、はるかに劇場に近いところにいる。だからオペラをお寺ととりちがえるようなことはあり得ないだろう。だが、仕事としてオペラに参加する以外に、観客として客席に坐ってオペラを観たり、レコードを聴いたりしている人の数は、舞台照明の世界でもそう多くはないだろうという気がする。

いわゆるクラシックのレコードの売上げが、レコード総売上げの5パーセントを切ったという話を聞いた。この比率をあてはめると、我々の仲間全員が音楽を聴いていると仮定して、そのうちクラシックを聴く人は20人に1人以下ということになる。クラシックの中でも、さらにオペラだけとなったら、もっと少ない人数になるだろう。

この問題は、実は舞台照明の話題としてとりあげただけではすまないのであって、現代のオペラが抱えている最も重要な課題なのだが、ここでは深入りせずに、照明の分野だけに話をとどめたい。

さて、私が言いたいことの結論を先に言ってしまえば、オペラは、歌劇という訳語があるように、声楽というよりも、むしろ劇であるということだ。

舞台芸術(Performing Arts)を、仮に、演劇、音楽、舞踊の3大項目に分類するとすれば、オペラは「音楽」の項ではなく、「演劇」の項に含まれるべきだと私は考える。オペラとシンフォニーの血のつながりよりも、オペラと演劇との関係のほうが、ずっと血が濃いのである。生理的にオペラが嫌いだという人にまでは言わないけれど、食わず嫌いの人には、演劇に対するのと同じような気持で、オペラを観たり聴いたりすることをおすすめしたい。ただし、最上級の良い上演を。舞台芸術に奉仕する舞台照明という仕事をしている人たちには、観たり聴いたりすべきだとすら言いたいくらいである。ことに、オペラと親戚である演劇の照明をしている人たち、同じ劇場で上演することが多いバレエの照明をしている人たちに。

オペラは決して特殊なものではない。お寺へお経を聴きに行くときのような覚悟は不要である。もし結果として、お寺へ行ったときと変らなかつたら、そのオペラの上演が良い出来ではなかったのにすぎない。

オペラと演劇の照明

「オペラと演劇の照明はどうちがうのだろうか」という質問を、過日、ある講習会で受けた。

「本質的には、オペラも演劇の照明も同じだと考えていただいてもよいが、演劇の場合には台本がもとになり、オペラでは楽譜(ピアノ・スコア)がもとになる。したがって、照明の変化のキッカケと速度を、演劇の場合には、ある台詞から始まって、ある台詞までに終るといのように決めるけれども、オペラでは、ある音符から始まって、ある音符までに終るといのように決める。演劇の台本とくらべれば、オペラの楽譜のほうが、音符によって時間的な進行の速度がより明確に規定されているので、照明変化

の速度も、演劇よりも明確にすることが必要である」と私は答えた。今でも考えは変わっていないけれど、他の問題点もつけ加えてみよう。

舞台照明を考える立場から言えば、演劇とオペラのちがいよりも重要なのは、演出のスタイルのちがいである。舞台装置も照明も、演出のスタイルというか、表現様式に支配される。したがって、職業的な舞台照明家は、自分の、特定のスタイルを持つべきではない。この点は画家や作家、詩人のように、1人で創作する芸術家とは決定的にちがう。照明家はいかなる場合にも、あらゆる演出家のスタイルに同化しなければならないのであって、それが嫌なら、特定の演出家とだけしか仕事を共にすべきではないだろう。

照明の作り方、やり方というのは、本来、演出のスタイルによって、さまざまであり、オペラの照明法とか、演劇の照明法といった虎の巻はありえない。照明の効果とか、テクニックとでもいべき共通項はあるかもしれないが、それをどう評価し、どれを取捨するかは、すべて演出による。

オペラと演劇の照明が本質的には同じといっても、細部ではちがう点がある。

第1に、オーケストラピットの譜面灯と指揮者に対する照明は、譜面がよく見えるかどうか、指揮者と指揮棒が、ピットの中の楽員と、舞台上の歌手の双方から、よく見えるかどうかが重要である。舞台照明家の仕事の範囲外だと言われるかもしれないが、配慮はあってしかるべきだろう。

ゲネプロ（ドイツ語のゲネラルプロローベの略。装置、衣裳、照明、メイクアップ付きの本番通りの通し稽古、もちろんオーケストラで）の開始時間は、演劇の舞台稽古が、しばしば遅れる場合があるのとくらべれば、ずっと正確である。ほとんど決められた予定表どおりに始まり、遅れたとしても数分以内だろう。したがって、もし照明の作業が残っても、作業を中断し、ゲネプロのスタートに影響を与えない

ようにする。これは、我国の舞台関係者のなかでは、オーケストラだけが、きちんとした、時間による契約関係をかちとっているためである。

実際の仕事

現在のところ、私が参加しているオペラのスケジュールは、東京文化会館の最良の条件の場合で次のようになる。

第1日目 午前9時から午後4時まで。
照明の吊り込みと舞台装置の基本形の飾り込み。ただし、前夜のコンサートに使用した反響板の撤去作業があるので、以下すべて、実際には午前10時作業開始となる。

第2日目 午前9時から午後4時まで。
各場の舞台装置を飾り、サス合わせ（吊り込んだスポットライトの位置、角度、フォーカスを決める）。ほとんどの場合、平行して、歌手とコーラスの場当たり稽古が行われる。

第3日目 午前9時から午後4時まで。
ピアノによるハウプトブローベ（重要な部分だけを稽古する）。このスケジュールが入る場合は運が良い。照明はサス合わせの残りど、各場面の基本的なライトをつくる。この日を省略されて、いきなりゲネプロということが多い。

第4日目 午前9時から午後4時まで。
正午か午後1時からゲネラルプロローベ。この日の照明はついたり消えたり、はたから見ると、何でデータラメなことをやっているのだらうと思われるにちがいない。ゲネプロの進行に支障をきたさないようにしながら、電光石火の早業でライトをつくってゆく。キャストは初日組。

第5日目 午前9時から午後4時まで。
2日目のキャストによるゲネラルプロローベ。照明は、主としてキッカケのタイミングと速度をチェックする。

●第一図

	56		ドン帳 Open カーテンコール	A3	A3	A3	A3
	58		ドン帳 Close 幕前カーテンコール、指揮 Sus	〃	〃	〃	〃
	59		カーテンコール終り 客電UP、Centerは1Brへ	〃	〃	〃	〃
	60	L.O	前夜 Down				
	61		客電 50% 〃	Follow Spot (Bridge)			
	62		客電 〃 指揮 Sus 〃	1	2	3	4
205	63		3. ドン帳 Open				
206	64	1'15"	神殿の光 〃 コーラス上奥より神殿へ				
207	64'	7:30-02	上奥より アムネリス、ランス出	64 (30V) 7:30	64 (70V) 7:30		
209	65	1'35"	神殿の光 〃、ランス アムネリス 神殿の中へ入	〃	〃		
211	-1		アイダ 神殿より出「おのが故郷」				64 アイダ
217	67	28"	アイダ 絶望				〃
219	68	11"	アリア終り 現実にもどる				〃
〃	68'	7:30-02	アモナスロ 上奥より出			64 アモナスロ	〃
220	69	4"	アリア エリア 上奥へ、神殿 〃			〃	〃
222	70	17"	美しい祖国への想い			〃	〃
226	71	9"	㊸にもどる			〃	〃
227	72	30"	アイダの恐怖			〃	〃
229	74	カトヘジ	アモナスロの強い意志			〃	〃
232	75	12"	七霊			〃	〃
233	76	25' 〃	㊸にもどる			〃	〃



第6日目 午前9時から午後9時まで。

この日に、照明をやっとすべてこしらえることができる。午後6時の開場まで、各場面の舞台装置を飾って照明合わせ。舞台監督助手と照明オペレーターが歌手のかわりに舞台を動く。午後6時半から初日はじめてオペラと照明が完全に出会う。本来はこの日がゲネプロであるべきなのだが……。おそろべき綱渡り。

舞台稽古というものは、照明も含めてトライ・アンド・エラーのためにあるのだが、現在のこのスケジュールでは、エラーは許されない。舞台装置も照明も、しまったかと思っても修正する時間が無いからである。したがって、机上プランを練りに練って、エラーが無いよう考える。照明のオペレーターも全員が稽古場で稽古を見てから、劇場での仕事にかかるのが理想だが、現実はそのもゆかないので、キュー・シート（キッカケ表）や仕込図を、なるべく、きちんと、わかりやすく書いておく。

第1図は今年の4月に、東京文化会館で上演された、二期会の「アイダ」のためのキュー・シートの1部である。左からキッカケのあるピアノ・スコアの頁、キュー（キッカケ）番号、照明変化の速度、キューについての心覚えや歌手の出入り、右端にはフォロー・スポットがとらえるべき人物名と、フィルター番号が書いてある。A3というの、テレビで使う色温度補正用の、うすいアンバーのフィルターである。

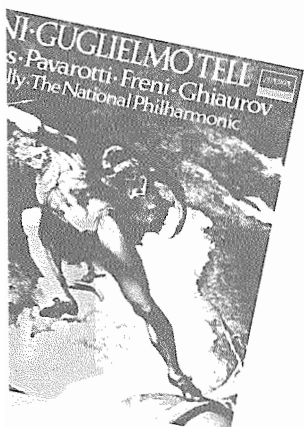
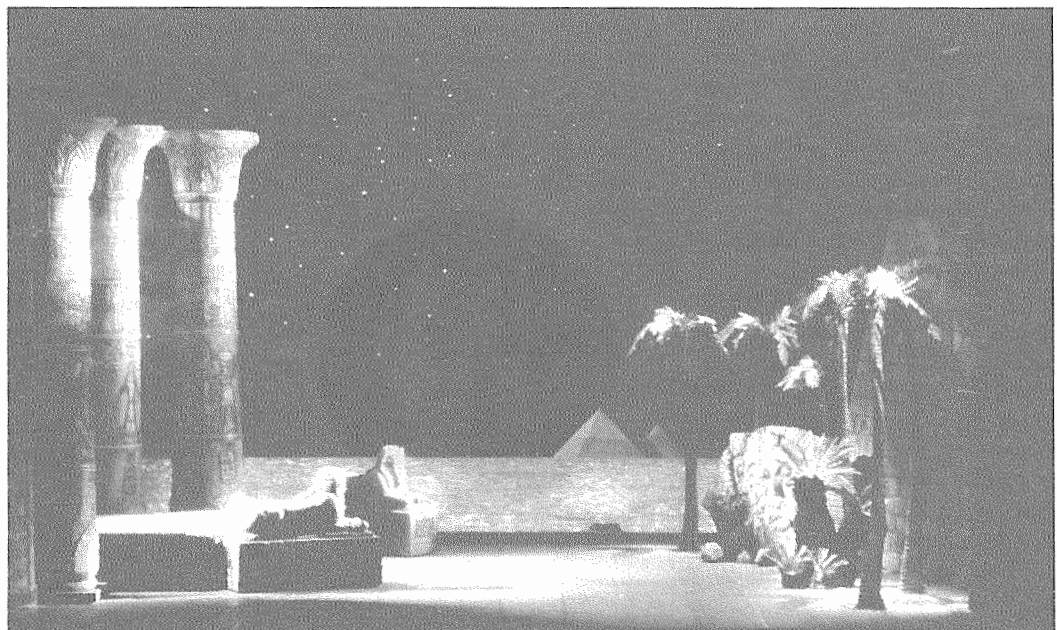
キュー番号59以後は、舞台前面に紗幕が使用されるので、客席最後部のフォロースポット＝通称センターは使用不可能になる。オペレーターは、休憩時間中に、センターから舞台上部の第1ブリッジに移動して、紗幕の中でフォローする。こちらはハログンランプなので、フィルターはクセノンの場合よりも、青味を強くしてある。といっても64は、もっともうすいブルーだが。

写真は「アイダ」2幕3場、有名な凱旋行進曲の次の場で、ナイル河の岸辺、イシスの神殿の入口の前である。キュー番号では、63から83までの場面。実際の上演よりも写真のために照明を明るくしてある。印刷でどれだけ細部が見えるかわからないが、うすぼんやりと、汚れかしみのように見えるのは紗幕の前（フロントサイド）から投映した雲である。プロジェクターは丸茂電機のEPQというタイプ。星は2回路になっていて、片方を明るく、他方を暗くして、遠近感をだしている。ナイル河の切出しの、やや強く光っている部分は、水のきらめきを、リップル（波）効果器で投映している。ピラミッドの下に、小さく黒い矩形が見えるかもしれないが、リップルマシンである。実際の上演では暗くて見えなかった。

この場面のキューは、フォロースポットのみをキューを除いて20あるけれど、これは演出によっては、ひとつだけのキューですんでしまうかもしれない。栗國安彦氏の演出では、アイダの独唱と、アイダとアモナスロの二重唱で、歌の内容、つまり、美しい故郷、民衆の苦しみ、恋と祖国愛との板ばさみ、恐怖の幻影などを、照明の変化と重ね合わせることを要求された。具体的にどのようにしたかの説明は難しいが、色彩にはあまり頼らず、明暗のバランスと紗幕への投映を重用して、派手な変化にならないように心掛けた。

オペラの場合には原語上演というケースがある。この「アイダ」もイタリア語で上演された。私はイタリア語がまったくわからないので、レコードの対訳と首っぴきで言葉の意味を理解するようにつとめた。オペラでは音楽が重要だが、同じように言葉も重要である。

尚、キュー・シートの他に、サス（Suspension Spot）の略。日本製英語であろう、外国では使わない。）吊込図、ステージ・ギャラリー仕込図、各場面仕込図（7枚）があるが紙面の都合上省略する。



活躍する照明家に

まきく

①会館の特徴、独自の企画や行事。②高校生やアマチュアの演劇活動について、印象、アドバイスなど。

大山和男 (青森市民文化ホール)

1 現在は、青森文化会館で、新しい会館設立のための準備に携わっていますが、この5月まで、青森市民文化ホールにいました。このホールは、一応多目的ホールとしてつくられていますが、舞台がどの席からでも見やすいことや、声ははっきり通ることなどから、演劇関係者に評判が良く、アマチュアの人からも使いやすくと好評です。

ホールでの独自の企画としては、今年の2月に、高校生、アマチュア、職場演劇の方を対象に、「舞台照明とはどういうことか」というテーマで講習会を開きました。これは、大変な反響を呼びまして、受講者も多く、新聞でも大きく紹介されましたね。来年もぜひやりたいと思っています。

2 やはり会場として使いやすいのか、県下の高校演劇の合同発表会が、2年連続でこのホールを使って行われました。その他にも、年1回、市内の中学と高校の合同発表会とか、アマチュア劇団の公演に使われています。

照明についての相談もよく受けますよ。プラン表をつくって下さいとか、色の使い方を教えて下さいとか。普段、学校で少ない器材を使ってやっているので、こういう設備の整ったホールにいくと、とまどうようです。頭の中ではできているんですけど、実際にできてきたプラン表が、アンバランスだったり……。

ですから、まず基礎的な事から教えていきますね。そうでないと全体がのみこめませんから。

合同発表会の時は大変ですよ。一日に各校が上演しますので、器具などの都合で、各校が持って来たプラン通りには、仕込みができないんですよ。そういう時は、最初にホールにある器具を説明して、それぞれのプラン表の中で、兼用できるものをチェックして、最大公約数にそった仕込みで、納得してもらっています。

原豊治 (神奈川県立音楽堂)

1 ここは、昭和29年の11月にできたんですが、当時は、他に会館がなかったものですから、芝居でも、音楽物でも、何でもやりましたよ。その後は、会館も増えてきましたからね。一応整理されてきて、大体、クラシックの音楽会を中心に利用されています。昔はオペラや、バレエもやっていましたが、今は、ピアノ、室内楽、声楽などのコンサートが主ですね。

音楽のための、特殊なホールですからね、反響板などの関係で、他の多目的ホールに較べて、仕込みなどに制限が多いんですよ。利用者の方には、そのところを理解していただくようにしているんですが……。

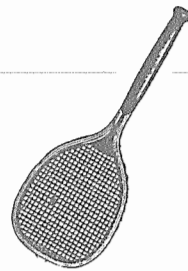
自主事業としては、春と秋の年2回、モダンダンスと、クラシックバレエの発表会をやっています。これは、県下の舞踊家が一同集まっての催しなんですけど、この時には、照明プランをつくったりして、力を入れてやっています。

2 高校生やアマチュアの方の舞台に接する機会が、あまりありませんのでね。アドバイスといわれても困るんですが……。

よく自身は、大庭三郎さんの講習会に出たり、「舞台照明の実際」という本を読んだりしたことが、大変参考になりましたね。それに、以前は、プランナーの方がよく会館に見えていましたので、そこで、いろいろな話を聞いたりしましてね。そういうことでは、恵まれていたと思いますね。

ダンスの舞台照明のむずかしさですか？ うーん、基本的には、芝居の照明とかわらないと思いますけど、ただ、会話ではなく、音と振りでキッカケをとりますからね。たとえば、踊りに合せて、フェイド・アウトするといった、一見簡単そうなことが、一番むずかしいですね。

照明家の仕事というのは、仕込みが早いとか、オペレーターとして技術的にうまいとか、そういうことだけじゃないと思うんです。やっぱり、明りには、その人の人間性が出ますよね。ですから、照明家としての勉強ということより、もっと大事なことがあると思うんですが……。



丸田悦男 (愛知県勤労会館)

1 この会館はね、愛知県労働福祉条例に基づいてつくられているんですよ。ですから、利用者に貸している大ホール、小ホール、会議室の他に、進路相談などをやる能力開発部、国連の資料を揃えた労働関係図書資料室といった施設もあるわけです。

場所は、鶴舞公園の中の南側にあるんですが、環境的にはいい所ですよ。設備面でも、水準以上のものがありますね。

2 そうですね、高校生の利用ということ、2年に1、2回、学校の文化祭で使われますよ。ぼくは、直接にはタッチしないので、舞台をのぞく程度ですがね。

舞台の印象ですか？ そうね、指導なさる先生によって、ずいぶんちがいますからね。ちょっと、これは違うんだけどね、学校が会館を使う場合に、生徒さんの観劇態度などで、その学校の雰囲気がかつちやうことがありますよ。舞台がいいとか、悪いじゃなくてね。ぼくらは、学校コンクールだ、なんて言っていますけどね。

昔は、よくアドバイスをしたりしていたけど、たとえば、こんな本を読むと参考になるよとか、最底、これくらいの器具を揃えた方がいいんじゃないかとか……。

そうだね、指導したり、アドバイスする時に大事なものは、プロの立場で、アマチュアの意図していることを早く読み取ってあげることだよ。

よく、アマチュアの人で、プロのことは聞きかじって、まちがって使っちゃったりしますよね。それを、こちらが額面通りに受け取ると、違ってきちゃうからね。まず、どういうことを意図しているのかということ、早く握むことだよ。それを知ってしまえば、「そのためには、こうした方がいいよ」とか、適切な助言ができるからね。

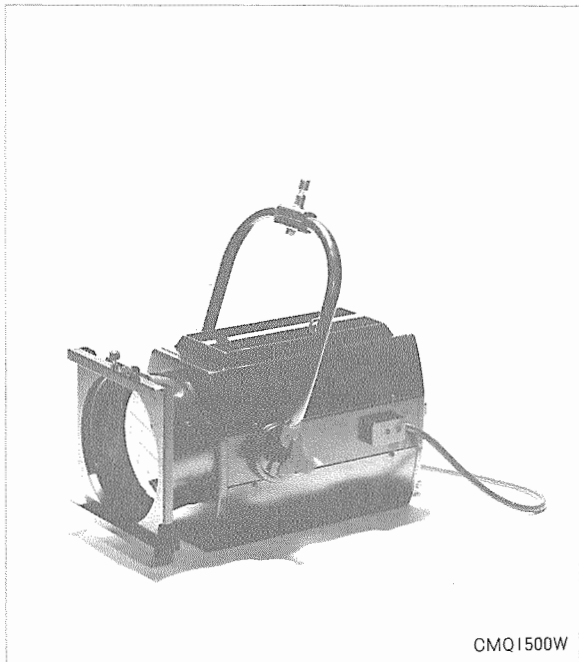


新製品ニュース

あのMARUMO C8スポットに
ハロゲンスポットが登場します。

CSQ1000W CMQ1500W CLQ1500W

CLQ2000W 四機種同時発売



CMQ1500W

この秋MARUMOから新しいシリーズのハロゲンスポットが発売になります。C8スポットとして既に高い評価をえているCE型シリーズがモデルチェンジして、CSQ1000W、CMQ1500W、CLQ1500W、CLQ2000Wの四機種、全部にハロゲン電球を装着して登場します。

CQシリーズの特長

- ①電球交換時の光軸調整は不要になりました。
- ②電球の交換は灯体後部を開いてワンタッチで出来ます。
- ③電球の耐用時間は約500時間と飛躍的に伸び、しかもこの間の色温度変化は最後までありません。
- ④大型の反射ミラーと10吋(1500W、2000W)、8吋(1500W、1000W)の大径レンズにより明るく無駄のない光を実現しています。
- ⑤独自の設計による通気性のよい灯具スタイルの採用で、小型軽量化と高い放熱効果を実現しました。
- ⑥新方式の焦点調節ノブによって軽くてなめらかな絞りの移動が行なえます。

以上のきわだった特長の他にも、すべての操作箇所は灯具後部と側面だけにまとめることによって完全にプレーンな灯具下面のデザインになり収納にも安定し安全で場所をとらない、など細かい配慮が随所にもりこまれています。

様々な新装備をもって、スポットライトの新時代を、MARUMO平凸レンズスポットライトCQシリーズがきりひらきます。ご期待下さい。

仕様	CSQ1000W	CMQ1500W	CLQ1500W	CLQ2000W
ランプ電圧	AC100V	AC100V	AC100V	AC100V
ランプ容量	1000W	1500W	1500W	2000W
灯体	SPCC	SPCC	SPCC	SPCC
レンズ	8" D-10" F平凸レンズ	8" D-14" F平凸レンズ	10" D-16" F平凸レンズ	10" D-16" F平凸レンズ
ミラー	140D-75RA鏡面反射	140D-75RA鏡面反射	140D-75RA鏡面反射	160D-90RA鏡面反射
コード	CT2 [□] -2芯1.5m	CT2 [□] -2芯1.5m	CT3.5 [□] -2芯1.5m	CT3.5 [□] -2芯1.5m
プラグ	T型20A	T型20A	A型20A	A型30A
ソケット	G-16	G-16	G-16	G-22
差枠	246×246 ^{mm}	246×246 ^{mm}	296×296 ^{mm}	296×296 ^{mm}
バンドア	8"バンドア(オプション)	8"バンドア(オプション)	10"バンドア(オプション)	———
塗装色	セミマットブラック	セミマットブラック	セミマットブラック	セミマットブラック
重量	9.5kg	10kg	14kg	14kg
適合電球	JP-100V 1000WB/G	JP-100V 1500W B/G-3	JP-100V 1500W B/G-3	JP100V-2000W B/G-3 (LCL-90 ^{mm})

●新製品についての詳細は、丸茂電機にお問い合わせ下さい。

MARUMO 新型スポットライトCQシリーズはハロゲン電球を装備した新鋭機種です。特にサイドフロント用スポットやシーリングライト用スポットとしては、新採用の大口径平凸レンズの効果とあわせて、絶大な威力を発揮します。さてシーリングライトの理想とはどういうものか、立木定彦先生に解説していただきました。

シーリング・ライト

立木定彦 (国立劇場)

シーリングとは天井のことで、観客席の上部天井に設置された舞台投光用の照明器具をシーリングライトと呼ぶ。客席照明用一般灯の器具群は客席灯（ハウスランプ）と呼んで、舞台照明用のシーリングライトとは区別している。

旧式の近代劇場の観客席はドーム状であったり、デザインも装飾的であり建築意匠上、あるいは構造上、天井に舞台投光のためのスポットライトを設置することは少なかった。舞台前方からの投光、すなわち客席側（フロント・オブ・ハウス、FOH）からの投光は、客席両側方上部からのサイド・フロントの位置から、専ら利用されていた。また、2階以上の階層式客席の場合に、張出した客席前端にバルコニーなどと位置名称をつけてライトを設置した。しかし、舞台に対して出来る限り多方向、多点の投光を可能にしたい要求に対して、客席天井にシーリングライトを設置し、作業が出来る通路やブースを建築的に予め設ける方式の劇場が増えてきた。

シーリングライトは、平面図には観客視線とほぼ一致する投光が出来るため、舞台上の対象を正面から照射でき、正面性のある照明として、サイドフロントの対象の正面に対して、方向性のある投光を緩和し、舞台前面の照度をあげるのに効果がある。

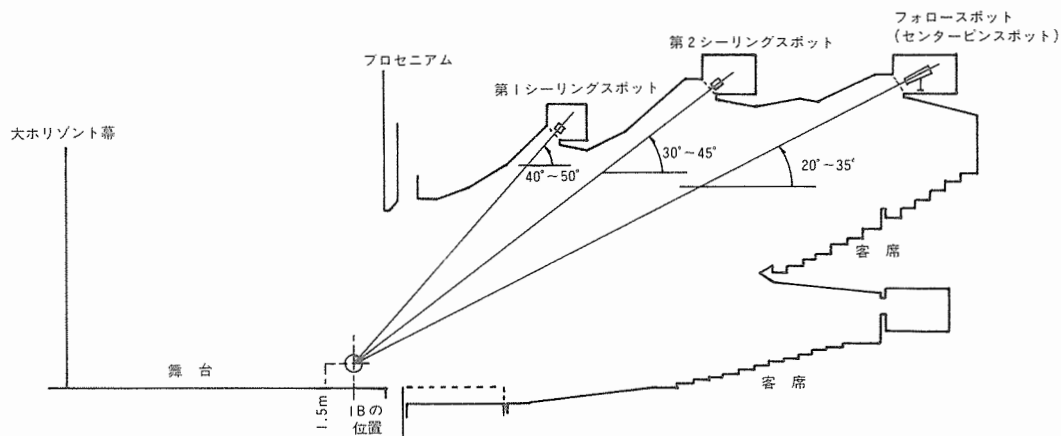
シーリングライト投光で問題の多いのは、断面、すなわち上下方向の投光角度で、投光角度が90°に近づくほど、サスペンションライトの効果に近づいて正面性を失い、逆に角度が減ずるにしたがって、照射対象の反対側に生ずる影の処理が面倒な問題になる。中心線上で投光角度45°の場合、背の高さ160cmの人物の影は、160cmになるわけである。投光角度は35°~45°の範囲が適切だと云われているが、実際には舞台床面の形態、客席の天井高などと複雑に関係し、特に投光ビームの上端が、プロセニウムアーチの下端や、前の一文字などが障害になって、予想よりも舞台後方への投光が困難になることが多いことに留意すべきであろう。

したがって、シーリングライトの配列は、2列以上の多列にレイアウトして、投光角度の選択度を増す方法が採用されることが多い。

シーリングライトと似た正面性照射の手法として、フォロースポットライトがある。フォロースポットは、強力なスポットライトのビームで特定の登場人物をフォローして、照明で際立たせる手法であるが、フォロースポットは舞台の奥まビームが届く必要があるために、照射角度は35°程度が望ましいとされている。

シーリングライトの照明器具は、スポットライトが主力になるが、前述のように投光角度45°の場合、平面で距離20mの位置にあると中心光軸の投光距離は約1.45倍の29mになる。つまり、投光距離は現場の感覚よりも長く、かつ照度は逆二乗で減衰することになるから、明るさの効果は著しく悪いことになる。シーリングライトが多列配列になり、多数のスポットライトを束にしてフラットな照明に使用される傾向にあるのは、このような物理的な理由による。従来は単位効率の高いフレネルレンズスポットが設置されることが多かったが、フレネルレンズのビームが拡散し、プロセニウムアーチ周辺にハレーションを生ずる欠点が防止できなかった。プレーノコンベックスレンズスポットは、この点の欠点は少ないが、シーリングからの投光距離が、20mを越える著しく大きな劇場で1KW、6インチ口径、焦点距離8~9インチ程度の通常仕様のスポットライトを、転用、設置している例が見受けられるが、こうした施工例は、照明工学のイロハを知らない困った例である。

シーリングライトは、客席の上部天井にあるため、灯具自体あるいはカラーフレームの落下防止などを充分、注意すべきであり、シーリングのスポットについての色換え、照明方向の調整、電球の交換などの作業が行なえる作業スペース通路の確保に留意すべきことは、勿論である。





木村嘉次 (京都会館)

1 京都会館は、昭和35年にオープンしました。第1ホールと第2ホールがありますが、第1ホールは、全体が六角形の形をした建物で、インドの音楽堂としてつくられたものです。ただ、これだけ大きい会館は他にありませんので、いろいろな行事に使われたりしますね。

第2ホールは、芝居用の会館としてつくられ、開館当初は高校演劇祭などに使われていましたが、近年は他の利用者も多く、高校演劇の方は府立の勤労会館を使って行われているようです。

このホールの近くに、昔の公会堂を改装した別館があるんですが、ここは、高校、大学などの演劇の小さな発表会に利用されています。設備も、ささやかですがありますので……。

2 実は、秋の文化祭に向けて、9月25日に「照明の実際」ということで、別館ホールを使って講習会をやりましてね。

これには、市内の13校の高校から、50名程度の参加者がありまして、私と大阪の岡田猪之輔さんとで、いろいろな話をしたわけです。

内容は、専門家の芝居の照明に対する基本的な考え方、器具の特長と扱い方、簡単な仕込み図の書き方、カラーフィルターの使い方、それに、実際にサスを吊って、室内の電灯が灯っている状態をつくったり、ホリゾントを三つの色の配色でさまざまに染めたり、そういった実地もやりました。

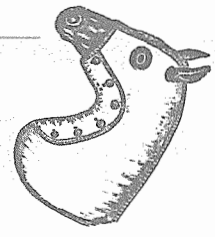
ちょっと専門的すぎたかなとも思うんですが、みんなスポットの前のカラーホイールをグルグル回すのが、舞台照明だと思っていますからね。

舞台照明について、基本的なことを知ってほしいということで、やったわけです。

こういった企画は今回初めてでしたけど、私が出向いて行って、たとえば職場劇団の照明担当者と話をしたり、助言したりということとは、よくありますね。

このホールで、高校演劇祭をやっていた頃にも、照明担当者を集めて、どういう照明をつくりたいかということで、相談を寄せたりしていました。

まあ、高校生は専門家ではないんだから、特別に照明の技術的な勉強をする必要はないと思いますね。それよりも、台本の読み方とか、芝居の勉強をする方が大事ですね。



武田重文 (鳴門市文化会館)

1 鳴門市というのは、ベートーヴェンの第九交響曲が初演されたところでしてね。この文化会館が新設された時、市民による「第九」のコンサートが開かれました。また、九月には、姉妹都市の群馬から、群馬交響楽団を招聘して、演奏会を開いたりしています。

会館は、市の中心部に近い市役所のすぐそばにありまして、キャパシティが1500の県下で一番大きなホールですよ。

設備の面では、四国で初めてのワイヤレス・コントローラーがありますが、これは重宝していますよ。

2 年中行事として、県芸術祭というのが行われていますが、その一環として、高校演劇祭が11月にありますので、そのお世話をしています。これは、2日にわたって、県下の高校が9校から10校参加します。

この時に、事前に生徒さんと打ち合せをしますが、専門家では気づかない、突拍子もない、奇想天外な注文や相談を受けて、とまどうことはありますね。

たとえばね、ホリゾントに天国への道を照明で出してくれとか……。私もまだ行ったことがないので、天国へ行く道がどうなのか知らないんですけどね。吹き出しそうになりながら、相談にのっていますよ。

やっぱり、よく相談に来て、熱心に聞いているグループが、総じて舞台もいいですよ。

ただ、高校演劇祭というのがコンクールで、照明も含めた舞台全体を評価の対象にしていますので、どこまで踏み込んでアドバイスしていいのか、ちょっと難しい所がありますけど……。

一つの傾向としては、そうですね。色彩に関して、濃度の濃い色を使いたがる傾向がありますね。芝居に合わない原色を使いたがるようですね。

稲田智治 (飯塚市文化センター)

1 この会館の特徴といえば、日本で初めてのコンクリートホールなんですよ。壁などに吸音材を使っていないわけです。そのかわり、天井に300~400位の穴を明け、そこに、さかさにしたビール瓶が埋め込んであります。これが、吸音の役目を果たしているわけです。

市としては、特別に行事を企画してはいませんが、飯塚文化団体というのがありまして、ここが主催で、いろいろな文化事業を行っています。

2 文化センターには、300人程の収容人員を持つ小ホールがありまして、そこをアマチュア劇団がよく公演に使っていますね。

飯塚市というのは、演劇活動が盛んなんですね。市内に2つ、市周辺に2つ、そういったアマチュア劇団がありまして、合せて年10回くらいの公演を、この小ホールでやっていますよ。

演目ですか？ この前は、宮本研さんの「不如帰」をやっていましたが、大体は創作劇が多いようです。

ただ、この小ホールは照明の設備がないものですから、大ホールの方から器具を持ってきたり、調光器を準備したりしなければならぬわけです。その段階から、相談にのって、お手伝いしていますよ。

照明の技術的なことについては、まだ、そういった指導が行き届いていないものですから、プラン表も持ってこなかったりということもありますね。ですから、台本を読んで、プランを作ってあげたりしていますよ。

こういう場合は、技術的なことを最初から教えていくことは大変ですからね、「こんな明りにしたい」という、漠然としたイメージだけでも、持つようにと言っているんですよ。それには、よその舞台などをよく見て、研究したりすることが大切ですよ。細かいことについては、実際にやっていくなかで説明して、わかってもらうようにしています。

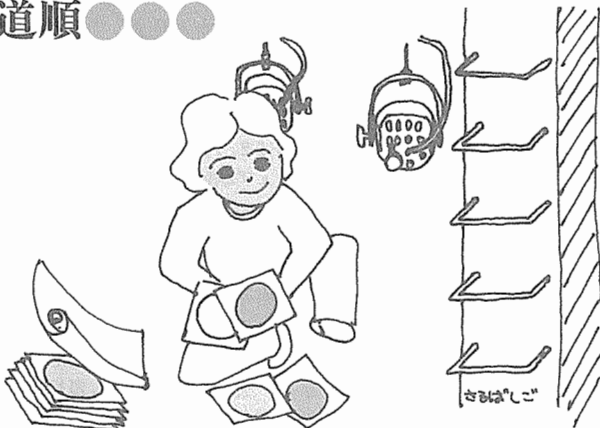
今、500席くらいの中ホール建設の計画があるんですが、これができれば、さらに積極的な活動が生まれてくると思いますね。



ぼくのあかり屋修業③

矢田谷幸治 (東京舞台照明)

道順 ●●●●



さて、フロントを合わせ終り、シーリングに駆け登る。今日の会場はフロントのそれぞれ下手、上手の両方からシーリングに行けるが、会場によっては片方からしか行けなかったり、あるいはフロントとは全然別の入口から行かねばならなかったりで、簡単に目的地へ行かせてもらえないことが多い。

色切り係の僕としては、まず幕前の台数に応じた色を揃えることから始まる。この台数は必ず、各会場毎に確認を取らなければならない。いつも6台だと思って上に行くと、より多く必要になったりして、また駆け降りて色を取りに行かなくてはならないことになる。

「誰だ！ 色を揃えたのは！」怒声が飛ぶ。

こうして、カラーシートの束を抱えて、あらかじめチーフにお伺いをたてる。

「シーリングへはどう行くのですか？」

「会館の人に聞け！」とうるさそうに言われる時がある。そんな時は大体においてシーリングへの道順を知らないか、忘れてしまっているのだ。チーフになりたての人はそうでもないが、古参のチーフはもう何年も幕前には行っていないからだ。チーフだからと言って何でも知っている訳ではない。しかし、あけっぴろげにそのことを明きらかにしてはチーフが傷つく。さりげなく会館の照明さんに伺うのがいい。

幕前への道順は各会場によって違う。だから覚えておくとか次に同じ所に来た時に仕事が早い。沢山の会場を日替りで回る訳だからメモ帳に書いておく。「……下手の調光室奥のさびはしごから登る。上がりきった所の右側に作業灯のスイッチあり……」等々。

作業灯 ●●●●

フロント(「投光室」とも呼ばれる。仕込図ではFR又はFrと書かれる)や、シーリングは暗いのが普通だ。(シーリングというのは天井ということだが、僕達を使うのは天井裏である。仕込図ではCL又はClと書かれる)

しかし、作業用の電灯はついている。(ついていない所もあるが、その時はあきらめる)舞台からは「早くしろ！」と急かされるから悠長にしていられないが、作業の前には必ず作業灯のスイッチを探して点灯してから仕事にかかるようにしたい。特にシーリングは鉄骨の梁がむき出しになっていてジャングルみたいな所だけに、思わぬケガの危険がある。手さぐりで通路を探し探しソロソロ行くのは能率が悪い。どんなに下から急かされても急がば回れである。怒鳴る方も、少々時間がかかっても確実な仕事を結局は望んでいる。

シュートが終わって下へ降りる時に、その作業灯を消すことを忘れてはいけない。開演直前になって気がつくという失敗もある。

「誰だ消し忘れたのは！」

あわてて階段を走るのは言うまでもなくペイペイの僕である。ギリギリまで気がつかないチーフもドジだが、その原因を作った僕はもっとドジだ。

コミュニケーション ●●●●

フロントもそうだが、シーリングでも、まず照明を施す対象の基本となる位置のスポットから合わせ始める。フラッド(舞台全体をまんべんなく)に当てる時は普通、下手、上手の両端から決めていく。間口の広さとスポットの台数との関係で、フォーカスの大きさが決まる。例えば6台のスポットでカバーしようとする時、間口6間と10間とでは当て方を変えねばならない、ということだ。

特にシーリングを二人かそれ以上で合わせる場合、お互いに声をかけ合いながらフォーカスを揃えることが大事だ。そうしないと、いつまでたっても「OK」のサインが出ない。自信のない時は合わせ終ってから「どうでしょうか！」と舞台に向かって大声を出して伺いをたてる。

劇場という所は、一人でぼつんと佇んでいると、シーンとしていて淋しいくらいだが、作業中は音が反響し合っていてやかましい。照明の当たり合わせの為だけに時間がとれる時はまれである。大道具さんや効果さんとの併存で舞台が作られていく。仕込み作業の時間が短い時など、まさに戦争である。

この「大声を出す」のも難しい。初めのうちはなかなか出せないで苦勞する。しかし、「ハイッ！」という返事ひとつでも大声で言うのは、聞く方も気持ちが良い。それだけで意志が通じ合うと思うのは単純だが、少なくともコミュニケーションは充分にとれる。僕達の仕事では特にこれが大事だ。「良いのか、悪いのか」「出来たのか、駄目なのか」「終わったのか、まだなのか」とにかく、声で伝達し合って、一つひとつ確認しながら進められていくしかないからだ。

シーリングの当たり合わせの時など、特に痛感する。スポットの前方に金網の張ってある所が多いが、この網目のこまかいのは舞台が見えづらい。モタモタしていると、やはり舞台から怒鳴られる。(とにかく僕達は良く怒鳴られる)

「何をいつまでやっているんだ！」

「すみません。良く見えないので……」

「バカヤロウ！ それならそうと言わなきゃ駄目じゃないか！」

「ハイッ！」

「一番下手端のスポットから行くゾ！ もっとフォーカスを出して、もっと中へ振って、首を下げて……」

モタモタしているのを怒られたのではない。コミュニケーションをとろうとしないで、何でも自分でやろうとすることを叱られたのだ。もちろん、自主的に、チーフから言われるまでもなくどんどん与えられた仕事を進めていくのは必要だが、「わからないこと」「やりにくいこと」は、はっきり声に出して助けを求めることは恥かしいことではない。

「そんなことも出来ないのか！」という罵声を受けるのはつらいが、「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」いつも同じ所でつまづくことになる。失敗は二度と繰り返したくない。

ナマもれ ●●●

失敗といえば、今日「ナマもれ」を何度も注意された。あまりに初歩的なことで情無いくらいだが、カラーシートはスポットのシート枠にしっかりとはさむことを習慣にしたい。特にブルー系のカラーシートは、ちょっとでもズレているとW(ナマ)もれが目立つ。みっともないのは言うまでもない。もちろん、シートの中にポリカラーがキチンと納まっていることが前提だ。

またカラーシートをシート枠にフィットさせる為だけでなく、落下防止の為にも「バインド掛け」もできることならしておきたい。スポットのシート枠からシートが落ちて、ブルー舞台(夜の情景など、舞台全体がブルーに染め上がっていること)の最中に、Wがドバツと出ては大トチリである。特にフロントはスポットがむき出しだから注意が肝心だ。たまにだが、シートがはずれて客席へ落ちるのを目撃することがある。幸い、これまで事故はない様だが、金属(カネ)シートの角が観客の頭に当たったらと思うと、想像するだけで身振いがする。

「バインド」というのは1呷くらいの太さの黒いビニール被覆の鉄の針金だが、いろいろと用途が広い。これからの話にもちょくちょく出てくると思う。

何によらずそうだが、特に「幕前」では、あわてずに、細心の注意を払いながら仕事をするのが肝心だ。しかし、ゆっくりやるのでは誰にでもできる。素人と同じだと言われる。

時間をかけずに、いかに完璧な仕事をするかが問われる。プロの世界は厳しい。

アマチュア演劇人のための照明アラカルト

可搬型調光器のショートを防ぐ 岩品健介(産照)

トリアック(石)と云う半導体の特性を利用した可搬型調光器(商品名ディムバックT-6型)は、その扱いやすさと手頃な価格という利点もあって、学校、アマチュア演劇関係者、移動公演用に欠かせないものの一つになっています。

それは大変結構なことですが、「安全」の上からも上手に使いこなす為に、基本的なメカニズムの知識をもって頂きたいのです。

難しい数値や機能についてはメーカー(丸茂電機(株))のスタッフの皆様におまかせするとして、最低限ショートにより石をトバさないようにしたいものです。

折角、これから通線(電気を末端機器に流すこと。点灯すること。)をしようとするとき、フューズをトバシ、石をトバスことは、いかにも情けないことです。

そこで、皆さんにお願いしたいことは、日頃、末端器具(スポットライト等)を可愛がって欲しいのですが、もし、スポットライト等に欠損があり、ショートや、断線のあった場合でも、直スイッチ(ノーフェーズブレーカー)を使って、必ずテストをして頂ければ、ノーフェーズブレーカーは瞬間に切れ、各回路のフューズをとばすことも、各回路のフェーダーが効かなくなることも防ぐことが出来ます。

その他に容量オーバー(学校の場合は、1回路2KW、トータルとして主幹SWの規格許容量を守って頂ければ、先づ舞台稽古に入る前の電氣的なトラブルは殆んど無くなります。

今は地区コンクールや文化祭の真最中です。よい照明器具をうまく使いこなして、良い効果をあげてください。

古典の風格を支える MARUMOの技術

「ジーザス＝クライスト＝スーパースター」「コーラスライン」「アブロズ」といった傑作ミュージカルの上演。また、「エクウス」「小さき神の、作りし子ら」などの現代劇におけるすぐれた舞台成果。そして、創立以来の伝統を誇る、アヌイ、ジロドゥ、ラシーヌの定評ある舞台の数々。

常に、話題の舞台を提供してきた劇団四季が、創立30周年記念作品の第一作として、この10月、日生劇場において古典劇の最高峰ともいえる「ハムレット」を上演します。

創立メンバーの一人でもあり、昨年テアトロ演劇賞を受賞した日下武史のハムレットをはじめ、三田和代、藤野節子、浜畑賢吉といった充実した演技陣による、四季ならではの調和のとれたアンサンブルの妙。

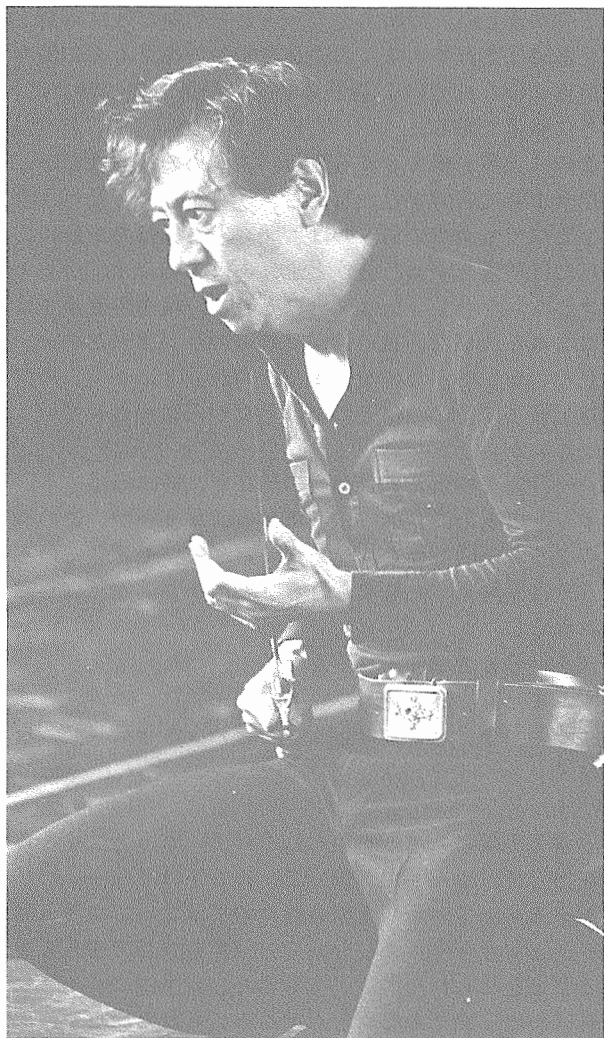
そして、古典劇にふさわしい風格とリズム感を併せ持った福田恆存の訳を受けて、浅利慶太の演出の冴えが、いかに、このドラマを現代に息づかせるか、舞台への興味は尽きないものがあります。

劇団四季の新たなスタートを飾る、この「ハムレット」の舞台でも、MARUMOの光が活躍します。

亡霊が現われる夜明け前の城壁の場から、悲劇的なハムレットの死に至るまでの、息もつかせず展開していくドラマの中で、さまざまな情景を浮び上がらせ、登場人物の心理の移を巧みに照射していく光。

MARUMOは、このドラマを担う光を、技術の粋を尽して創り出します。

●「ハムレット」稽古風景



編集室



●長い間、ご愛読をいただきました、小川昇氏の「舞台照明の基本」は、今回をもちまして、一応終了させていただきます。舞台照明を、光の性質を知るといふ、基本的な立場からやさしく説いていただいたこのシリーズは、多くの示唆を含み、大変参考になるものでした。また小川先生は、この度、12年間務められた日本照明家協会の会長の職を勇退されました。日本における照明家の地位確立に、協会の基礎づくりにと、長年にわたるその多大な尽力は、特筆されるものがあります。先生は、主に新派、新国劇の舞台照明を手がけておられますが、しっとりとした、味わい深い照明の世界で、今後のご活躍を期待したいと思います。

●「近松心中物語」「スウィニー・トッド」など数多くの舞台を手がけられ、すぐれた仕事を残しておられる吉井澄雄氏に、「オペラの照明」の原稿をいただきました。緻密な計算と大胆な発想で、舞台照明に取り組んでおられる氏の姿をうかがうことができます。

●今号の「きく」では、各地方の会館で照明の仕事に携わっておられる方に、インタビューをお願いしました。地域との結びつきを大事に考えながら、よりすぐれた舞台をとの熱意が電話口から伝わってきます。特に高校生をはじめとする、若い人たちからの相談、質問には、労をおしまず取り組んでおられるようです。舞台をつくっていく上での、さまざまな問題点を、こういった身近な会館の専門家の方に相談してみたいはかがででしょうか。親身で、適切な助言をいただけると幸いです。今後とも、ライティング・ニュースでは、専門家と読者とのよきパイプ役を務めていきたいと思ひます。

●発行——丸茂電機株式会社
〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(252)0321(代)

●編集責任者——井上利彦
編集協力——小川昇舞台総合研究室 東京舞台照明 レクラム社

●このニュースは弊店からお届けします。

●マルモ・ライティング・ニュースは、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。